

富山県の若者に高等教育の機会を 馬場 はる

旧制富山高校の創設費を寄付

「ヘルン文庫」を寄贈

女性初の富山市名誉市民



1886 (明治19) 年2月22日—1971 (昭和46) 年5月20日

商家で厳しいしつけを受ける

下新川郡泊町 (現朝日町) の旧家小沢家で生まれました。小沢家は大変裕福な商人の家で、江戸時代に加賀藩の十村も務めた名のあ有家柄でした。はるは厳しいしつ

けを受けて育ちました。

はるは15歳のときに、上新川郡東岩瀬町 (現富山市) で海運業を営んでいた馬場家の長男、馬場道久に嫁ぎました。



馬場家



若いころの姿 (馬場家提供)

富山にも高校をつくりたい

はるは一男三女の子どものに恵まれ、幸せな生活を送っていました。しかし、夫の道久は40歳の若さで亡くなってしまい、子育てと海運業の経営を一身に背負うことになってしまいました。

長男の正治が県立富山中学校 (現県立富山高校) から慶応義塾 (東京都) に入学したとき、受験勉強に苦しむ姿を見て心を痛めたはるは、「県内にも高校があれば

いいのに」と考えました。

このように考えていたのははるだけでなく、多くの県民の願いでした。当時、富山県には中学校より上級の学校はなかったため、旧制高校に進学したければ、石川県や新潟県のほか、東京など大都市に行くしかありません。

しかも、日本全体で高校が少なかったため、入学試験はとて難しかったのです。

旧制富山高校 (現富山大学) 設立に多額の寄付

夫が亡くなった4年後の1923 (大正12) 年、はるは「高校創設に使ってほしい」と県に150万円 (現在の20億円程度：米価から推計) を超える寄付をしました。

県はこの寄付金に県のお金を足して、同年10月、県内で初めての高校となる旧制富山高校 (現富山大学) を設立しました。上新川郡大広田村 (現富山市蓮町) に校舎が建てられ、1924 (大正13) 年春

に開校し、第1回入学生を迎えました。

この高校は7年制で、生徒は尋常科で4年間中学校の勉強をした後、高等科に進んでさらに3年間学びます。

尋常科に入学すると従来の旧制高校受験の必要がなく、県内から通学ができるので親の負担も少なくて済むことから、県民は旧制富山高校の開校をとて喜びまし



旧制富山高校の跡は現在、馬場記念公園となっています。

た。毎年多くの生徒が、旧制富山高校の入学試験を受けました。

*ラフカディオ・ハーン 明治時代中期に来日したアイランド人の作家、教育者、ジャーナリスト。小泉八雲と名乗り、『怪談』などの文学作品を通じて日本の文化を海外へ紹介しました。

女性初の富山市名誉市民となる

はるは旧制富山高校が開校された後も、高校のために寄付を続けました。明治時代の文豪として知られるラフカディオ・ハーン*の蔵書などをその遺族から買い受け、「ヘルン文庫」として開校の記念に高校へ寄贈しています。

旧制富山高校は多くの優れた卒業生を旧帝国大学などに送り出しました。1949 (昭和24) 年に国立の富山大学が設置されたのに伴い、旧制富山高校は27年の歴史を閉じて富山大学文理学部として引き継がれました。さらに文理学部は経済学部、人文学部、理学部として発展しました。貴重な「ヘルン文庫」は富山大学附属図書館に保管され、世界の研究者によって活用されています。

こうした業績をもつはるは、富山大学の生みの親として、富山市

から1961 (昭和36) 年、名誉市民の称号を贈られました。女性が富山市の名誉市民に選ばれたのは初めてのことでした。

若くして夫に先立たれた不幸に負けることなく、夫の残した海運会社を切り盛りしながら、数々の社会貢献を行ったはるは、一方で、母としても4人の子どもを立派に育てました。当時、はるを「日本婦人の鏡」とたたえた人もいます。



ヘルン文庫



旧制富山高校

夢や志をかなえたポイント!

- ・周りのためにできることを実行する
- ・悲しいことを乗り越える
- ・家族を大切にする

豆知識 芥川賞を受賞した作家の堀田善衛 (→ 84 ページ) は堀田くにの三男です。

- 1886 (明治19) 0歳
下新川郡泊町の商家に生まれる
- 1899 (明治32) 13歳
生家の小沢家が全焼
- 1902 (明治35) 15歳
東岩瀬で海運業を営む馬場道久と結婚
- 1919 (大正8) 33歳
夫を亡くし子育てをしながら家業を継ぐ
- 1923 (大正12) 37歳
旧制富山高校を設立するため、県に多額の寄付をする
- 1924 (大正13) 38歳
小泉八雲の蔵書や原稿「ヘルン文庫」を旧制富山高校に寄付
- 1961 (昭和36) 75歳
富山市の名誉市民に選ばれる
- 1971 (昭和46) 85歳
亡くなる

コラム 富山県で初の託児所をつくった堀田くに

馬場はるが県に多額の寄付をした1か月前の1923 (大正12) 年4月、伏木町で、伏木婦女会によって無料の私設託児所が開設されました。その運動の中心になって活躍したのが堀田くににです。

くには伏木港で働く若い母親が子どもを預けて安心して働けるようにと、婦女会の仲間と協力し合い、町内のお寺の御堂を借りて小さな託児所を開きました。私設の託児所は県内で初めて、全国でも7番目でした。



園児と触れ合う堀田くに (伏木保育園提供)